

投稿論文

フィリピンにルーツを持つ子どもの 大学・短期大学への進学理由 —日本で高等学校を卒業した人たちの事例から

矢元 貴美 大阪大学グローバルコラボレーションセンター招聘研究員

キーワード：在日フィリピン人，進路，大学

本稿の目的はフィリピンにルーツを持つ子どもたちが高等学校卒業後に大学や短期大学へ進学することを希望した理由を明らかにし、その特徴を考察することである。高校を卒業したフィリピンにルーツを持つ子どもの進路に着目した研究はこれまでほとんど行われていない。本稿では初等中等教育段階で日比両国または日本のみでの学校生活を経験し、日本で高等学校（中等教育学校の後期課程を含む）を卒業した後に大学や短期大学へ進学した人たちに焦点を当てる。12名の調査対象者が大学や短大へ進学した理由をインタビュー調査に基づき明らかにし、事例を挙げながら分析する。調査結果からは、子どもたちの進学理由の特徴について以下の3点が明らかとなった。1点目は、国際的な経験を基に進学を希望していることである。10名が外国語学系や国際学系を選択した理由には、異なる環境で生活したことから抱いた興味関心、多様な国籍の生徒と学んだ経験、フィリピンとのつながりが影響している。2点目は、言語能力の優位性を活かしたいと考えていることである。日比間の移動を経験した人たちの多くが英語の運用能力を強みにして進学した。3点目は、日本以外での進学も選択肢に入れていることである。選択肢が多いことには利点もある一方、迷いや揺れも伴っている。フィリピンにルーツを持つ子どもたちは将来、多様な人々が暮らす社会を支えるグローバル人材となり得る人たちである。

1 研究の目的と背景

本稿の目的はフィリピンにルーツを持つ子どもたちが大学や短期大学へ進学することを希望した理由を明らかにし、その特徴を考察することである。初等中等教育段階で日比両国または日本のみでの学校生活を経験し、日本で高等学校（中等教育学校の後期課程を含む）を卒業した後に大学や短期大学へ進学した人たちに焦点を当てる。

現在日本の学校ではニューカマーの子どもたちが多く学んでおり、特に公立学校においてその数は増加傾向にある。金井（2004）が、日本人の高校進学率が97%を超えるのに対し、ニューカマーの子どもたちの高校進学率はおよそその半分に留まっていると指摘しているように、ニューカマー生徒の高校進学率はまだ低い。しかしながら外国人生徒対象の入学選抜を行う高校が増えたことなどにより、高校に通うニューカマーの数は増えている。

表1 日本語指導が必要な児童生徒のうちフィリピン語使用者の人数と構成比（2014年度）

外国人児童生徒の総数	母語がフィリピン語の者の学校種別在籍人数と構成比					
	総数	小学校	中学校	高等学校	中等教育学校	特別支援学校
29,198	5,153 (17.6%)	3,162 (16.7%)	1,377 (17.6%)	575 (25.3%)	8 (14.3%)	31 (17.5%)
日本国籍の児童生徒の総数	フィリピン語を使用する者の学校種別在籍人数と構成比					
	総数	小学校	中学校	高等学校	中等教育学校	特別支援学校
7,897	2,253 (28.5%)	1,695 (28.7%)	432 (27.2%)	116 (34.9%)	3 (9.7%)	7 (14.3%)

〈出典：文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成26年度）の結果について」〉

文部科学省の学校基本調査によると、2014年度、日本国内の初等中等教育で学ぶ外国人児童生徒は78,630人、帰国児童生徒^{*1}は11,146人であった。このうち高校に在籍する外国人生徒は12,458人、帰国生徒は2,053人である（文部科学省、2015a）。

また、文部科学省による2014年度の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査^{*2}」では、公立学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒のうち外国人児童生徒は29,198人、日本国籍の児童生徒は7,897人であった。外国人児童生徒は調査対象校種が小・中・高になった1995年度の約2.5倍に、日本国籍を有する児童生徒は当該の児童生徒の統計が初めて公表された1997年度の約5.8倍である（文部科学省、2015b）。このうち高校に在籍する外国人生徒は1997年度の461人から2014年度の2,272人へと増え、17年間で5倍近くに、日本国籍の生徒は1997年度の95人から2014年度の332人へと増え、17年間で約3.5倍になった。公立高校在籍者の総数2,357,565人に占める割合は約0.1%と高くはないが、増加していることは明らかである。

日本語指導が必要な外国人児童生徒のうち母語がフィリピン語^{*3}である者は5,153人で全体の約17.6%を占め、17年間で8倍強となり、母語別ではポルトガル語、中国語に次ぐ第3位を占める。日本国籍の児童生徒でフィリピン語を使用する者は2,253人で、全体の28.5%を占め、言語別では第1位である。言語別の在籍状況では、フィリピン語を母語とする外国人児童生徒の構成比は、小学校と中学校では約17～18%であるが、高校では25%を超えている。日本国籍の児童生徒では、フィリピン語を使用する者の構成比は小学校では約29%、中学校では約27%、高校では約35%となっている。従って、日本語指導が必要な児童生徒に占めるフィリピン語使用者の割合は高校において最も高く（表1）、小・中学校のみならず、高校においてもフィリピン語を使用する生徒が増加していると言える。

日本政府が日本は移民国家ではないという立場を採ってきたことから、教育分野においても、外国にルーツを持つ子どもたちへの支援施策は不十分であった。ニューカマーの子どもの教育に関する施策が本格的に始まったのは1989年であり、小・中学校における支援に重点が置かれてきた。しかしながら、日本での進学・就職を希望する生徒の増加に伴い、義務教育終了後や高校卒業後の進路保障が必要であると指摘されるようになった。外国にルーツを持つ子どもたちの進路志向を把握することは、子どもたちが希望を叶え、自らの経験や能力を活用できるようにするためにも、多様な人々が暮らす社会を支えるグローバル人材となり得る子どもたちを育成するためにも重要である。

本稿では、「フィリピンにルーツを持つ子どもたち」とは「両親または一方の親がフィリピン人またはフィリピン出身の子ども」と定義する。そして日本の公立・私立学校で初等中等教育を受けたこ

とがあり、日本の高校を卒業後に大学や短大に進学した人を対象として分析する。

2 先行研究の検討

本章では、ニューカマー高校生やフィリピンにルーツを持つ子どもの進路選択および将来展望に焦点を当てた研究を検討する。

ニューカマー高校生の進路選択や将来展望については今井（2008）、谷口（2010）、山崎（2005）、山崎（2009）による研究が行われている。以上の研究では、ニューカマー高校生の進路選択や将来展望には、生徒の言語能力、越境経験、学校文化、準拠集団、教師、ロールモデル、家庭の教育資源が促進要因および阻害要因になることが明らかにされた。

山崎（2005）では、大学進学を希望する生徒は具体的な計画を立てていることや、進学志望先は日本と母国だけに留まらず、第三国においても将来活躍することを望んでいることが指摘されている。また短大や専門学校への進学を希望する生徒は資格を取得し、資格を活かした仕事に就くことを希望しているという。大学進学の特徴の類型には、谷口（2010）の「学問興味進学型」「職業展望進学型」「モトリアム進学型」や、今井（2008）の「とりあえず進学」「職業に結びついた進学」「現実直面型」などがある。

特定の国にルーツを持つ子どもの進路選択や将来展望に着目した研究も行われており、中国系生徒に注目した広崎（2007）、鍛冶（2007）の研究や、ブラジル人生徒に注目した拝野（2010）、矢野（2007）、イシカワ（2014）の研究がある。以上の研究では、進路多様校^{*4}か進学校かといった学校文化は将来展望の実現に阻害要因として働くが、ボランティアや教員による支援は促進要因として機能すること、高校への進学と大学等への進学は日本での在学開始学年や社会経済的地位に強く規定されていること、似たような越境を経験した生徒でもキャリア選択には差異が生じること、経済的な理由や家庭の事情から進学できない人もいることが指摘されている。

フィリピンにルーツを持つ生徒の進路志向にも同様の特徴があると推察されるが、先行研究で指摘されていない理由で進学を希望している可能性もある。

日本で暮らすフィリピン人を対象とした研究はこれまで数多く行われてきたが、子どもは成人の移動に伴い居住地を変える存在として言及されることが多かった。フィリピンにルーツを持つ子どもの教育をめぐることは、主に学齢期途中で来日した子どもや親が抱える困難に関する研究が行われている。そのうち進路選択に関するTakahata（2011）による研究では、在日フィリピン人1.5世代の高等学校への進学経路が限られていること、1.5世代の若者たちが将来日比間をまたぐ仕事をしたいと考えていることなどが明らかにされている。高畑（2011）では、日本の高校に進学した経験がある1.5世代に着目しており、高校進学後も経済的な問題から中退する人や、高校卒業後の進学を断念する人もいることを指摘した。

教育に対する家族の意識や家族関係が子どもの教育に与える影響も研究されており、同居する家族と同様、他国で暮らす親族の影響も大きいことが指摘されている。徳永（2008）は中学校段階で来日したフィリピン系ニューカマー女子生徒の進路意識と将来展望には、ロールモデルとして位置づけられた親戚と母親や、女子生徒たち自身の来日経緯が影響していることを指摘し、トランスナショナルな親族ネットワークがもつ重要性も示唆している。額賀（2012）は、親に呼び寄せられた10代のフィリピン系ニューカマーの家族では、親と母国にいる親族が高い教育期待を子どもにかけ、子どもは親

に対して従順な態度を見せるが、期待や指図に対して、心の中では抑圧された不満が鬱積していると指摘した。

本稿の調査対象者にも学齢期途中で日比間を移動した人が含まれ、先行研究の対象者と共通点を持つ。しかしながら本稿で焦点を当てるのは、これまで注目されてこなかった、高校を卒業した人である。高校卒業者の進路は、中学校卒業者や高校中退者に比べて選択肢が増える。多くの選択肢の中から大学・短大への進学を希望した理由とその特徴を考察することにより、大学・短大への進学の意義や利点が明らかになると考えられる。

3 調査対象者と調査方法

本調査の対象者は、フィリピンにルーツを持ち、初等中等教育段階で日比両国または日本のみでの学校生活を体験し、日本の高校を卒業後、大学や短大へ進学した人々である。対象者は調査者の知り合いまたは知り合いから紹介していただいた方である。人数は男性5名、女性7名の計12名で、年齢は17歳から30歳である。20歳以上の対象者は子どもに当たる年齢を超えているが、各成長段階での経験を客観的に振り返り、気持ちの経時変化を説明することもできると考えられることから対象とした。

調査期間は2012年12月から2015年8月、所要時間は1時間から3時間である。2名には高校卒業後の進路が未定の段階で初回調査を、進路が決定した後に追加調査を実施した。使用言語はフィリピン語、日本語、英語のいずれかまたは複数の言語であり、通訳は介していない。インタビュー内容はその場でメモに取り、インタビュー後にまとめ直すとともに、対象者の承諾を得た上で録音し、文字起こしを実施した。

調査方法には半構造化インタビューを用いた。質問項目群は①基本的属性、②日本-フィリピン間の移動の経験、③これまでに受けた学校教育、④高校卒業後の進路を選択した理由である。準備した質問項目順にはこだわらず、対象者が話しやすいように進めた。調査対象者側から質問されることや、調査者と調査対象者が会話しながらインタビューが進むこともあったため、一部非構造化インタビューとなった。

フィニー・デニス・オソリオ (Phinney, Dennis & Osorio, 2006) は、アメリカの大学に通う、民族的に多様な背景を持ち、社会経済的地位が低い中程度である学生の進学理由を研究している。民族的少数者と移民の若者の大学進学理由は、文化的要素と同様、社会階層と移民の世代に影響されやすく、ヨーロッパにルーツを持つ学生とは異なる可能性があるという視点で分析した。特徴的な理由として、家族を助けるため、自尊心を高めるため、進学を勧められたため、という3点が明らかになったと指摘している。本稿では、フィニー・デニス・オソリオの分析の視点に準拠して分析することとする。以下では調査対象者の日比間の移動とこれまでに受けた学校教育を概観した後、日本で高校を卒業した後に進学した人たちが大学や短大への進学を希望した理由に注目し、事例を挙げながら分析する。

4 日比間の移動経験とこれまでに受けた学校教育

調査対象者の国籍はフィリピンまたは日本、あるいは日比二重国籍で、1名のみ既婚で他は全員未婚であった。出生地は5名が日本で、7名はフィリピンである。インタビュー時、10名は日本に、残

りの2名はフィリピンに居住していた。RさんとTさんは姉妹である。

日比間の移動では、日本生まれ日本で育ちでフィリピンでは一時滞在のみを経験している人が2名で、6名は1度、4名は複数回の移動を経験していた。また全員が日本在住中にフィリピンで、フィリピン在住中に日本で一時滞在を経験していた。

日比間を移動した年齢は様々である。成人前の日本への移動の理由で最も多かったのは、先に日本で暮らしていた母親や家族と一緒に暮らすことであり、フィリピンへの移動の理由は、家庭の事情か学業のためであった。「学業のため」という理由の背景には、小・中学校時代、または高校や大学への進学時に、フィリピンでの勉学を選んだか、日本で学業を続けることが叶わなかったことがある。

一時滞在のみを経験している2名以外は初等中等教育の途中で日比の学校間で移動し、複数回移動した人も2名いる。

男性1名(Iさん)のみが日本国内で高校を卒業した後、フィリピンの大学に進学した。Iさんは初等中等教育段階で日比両国での学校生活を体験し、帰国生徒を対象とした入学者選抜を行う高校を卒業後、フィリピンの大学の国際関係学部に進学した。

日本で高校を卒業した後、日本の大学や短大へ進学した人は男性4名、女性7名の計11名(Aさん、Bさん、Eさん、Nさん、Oさん、Pさん、Rさん、Sさん、Tさん、Vさん、Yさん)である。9名が初等中等教育段階で日比両国での学校生活を体験し、2名が日本のみで体験していた。外国人生徒や帰国生徒を対象とした入学者選抜を行う高校または中等教育学校を卒業した人は9名である。四年制大学に7名、短大に4名が進学し、進学先の学部は、6名が外国語学系、4名が国際学系、1名がそれ以外の文系学部である。

外国人生徒や帰国生徒を対象とした入学者選抜を行う高校では、学習面や生活面、進路選択での支援など、外国にルーツを持つ生徒たちへの支援体制が整っていたと考えられる。

表2は調査対象者の日比間の移動とこれまでに受けた学校教育をまとめたものである。複数回調査した対象者の年齢は初回調査時のものである。なお、フィリピンでは小学校6年間、ハイスクール4年間の計10年間の初等中等教育が行われてきたが、2012年度から小学校6年間、ジュニアハイスクール4年間、シニアハイスクール2年間の計12年間の初等中等教育が始まった。フィリピンで過去に中等教育を受けた調査対象者は旧制度で学習しているため、本稿では「ハイスクール(HS)」と表記する。

5 日比間の移動経験と進学理由

本章では、移動経験ごとに調査対象者の進学理由の特徴を明らかにする。

(1) フィリピンから日本への移動を経験した場合

フィリピンから日本への移動を経験したのはAさん、Bさん、Eさん、Oさん、Rさん、Tさんである。

Aさんは初回調査時には高校生で、卒業後、四年制大学の国際学系学部に進学した。両親はフィリピン人で、近隣に暮らす父方の親戚一家と集まることもある。Aさんが通った夜間中学校と高校には多様な国籍の生徒が通っており、Aさんにも様々な国籍の友人がいる。言語は英語、フィリピン語、日本語、フィリピンの地方言語の順に得意であり、家庭ではフィリピン語、日本語、英語を使うとい

表2 調査対象者の属性および日比間の移動とこれまでに受けた学校教育

対象者	性別	年齢	出生地	国籍	日比間の移動	学校教育
A	男	20	比	比	15歳, 比→日	[比] 小→別の小→ハイスクール(以下, HS) → [日] 夜間中→高(→後に大学進学)
B	女	17	比	日比	14歳, 比→日	[比] 小→HS → [日] 中→高(→後に短大進学)
E	男	19	比	日	11歳, 比→日	[比] 小→別の小→[日] 小→中等→大(中退→留学)
I	男	19	日	日	6歳, 日→比 14歳, 比→日 18歳, 日→比	[日] 小→ [比] 小→ [日] 中→高→ [比] 大
N	男	30	比	比	9歳, 比→日 11歳, 日→比 12歳, 比→日 成人後, 日→比	[比] 小→[日] 小→[比] 小→[日] 中→高→大(中退)
O	男	22	比	比	7歳, 比→日	[比] 小→別の小→ [日] 小→中→高→大
P	女	22	日	日	—	[日] 小→別の小→中→高→大
R	女	20	比	比	12歳, 比→日	[比] 小→別の小→ [日] 中→高→大
S	女	19	日	日	4歳, 日→比 13歳, 比→日 13歳, 日→比 14歳, 比→日	[比] 小→別の小→別の小→HS → [日] 中→別の中→高(→短大進学予定)
T	女	22	比	比	13歳, 比→日	[比] 小→別の小→HS →[日] 中→高→短大(卒業)
V	女	18	日	日	2歳, 日→比 14歳, 比→日	[比] 小→HS → [日] 中→高(→短大進学予定)
Y	女	21	日	日	—	[日] 小→中→高→大

う。高校入学後に1回、フィリピンに一時滞在していた。

進路多様校に通っていたAさんが大学進学を希望したのは高校の英語教師になりたいという夢のためであった。「難しい」と語っていた第一志望の大学には合格できず、不合格後に高校の先生が勧めた第二志望の大学の推薦入試を受け、書類審査と面接を経て合格した。合格した大学では教員免許が取得でき、渡日生対象の授業料減免制度が利用できる。

英語教師になりたいと思ってる。高校の。先生らが言ってるのは〇〇大学。でも難しすぎるらしいから、行けるかどうか分からない。【Aさん】

(第二志望の大学を選んだのは)先生たちに「ここにし(=この大学にきなさい)」って言われた。教員免許も取れる。【Aさん】

Bさんは初回調査時には高校生で、卒業後、短大の外国語学系学部に進学した。同じ高校に入学した双子の兄はフィリピンでの大学進学を視野に入れ、日本の高校を退学してフィリピンのハイスクールに転校した。Bさんの中学校と高校には多様な国籍の生徒が通っていた。家庭内言語はフィリピンの地方言語、フィリピン語、日本語で、Bさん自身はフィリピンの地方言語、フィリピン語、英語、日本語の順に得意であるという。年に1回程度、フィリピンに一時滞在していた。

Bさんが通っていた高校は進路多様校であった。初回調査時にはBさんの希望進路は定まっていなかったが、今後も日本で暮らそうと考えていた。英語を活用できる仕事に就くことを視野に入れ、短大への進学を希望していた。

どのコースにするかは考えていません。英語ができるのだからもったいないと母は言います。通訳か英会話教室の先生か。[中略]短大でいいです。母には客室乗務員のコースに進むよう言われましたが、客室乗務員のコースは本当にもっと難しいです。【Bさん】

Bさんは高校卒業後に就職することも考えたそうである。だが、どのような仕事ができるかが分からず、日本語運用能力にも不安を感じていたため進学を選んだという。推薦入試で英語の試験を受けて合格した。短大では自分にとって負担が少ない英語を学ぶ間に苦手な日本語も学習しようと考えたと語った。

自分にどんな仕事ができるのかまだ分からず、まだ就職したくなかったので、大学に入りました。[中略]自分の日本語の知識がまだ充分ではないので心配で、英語を学びながら日本語学習に重点を置けると考えたので、その大学を選びました。【Bさん】

Eさんは四年制大学を1年目の途中で退学し、アメリカ留学の準備中であった。日本人の父親とフィリピン人の母親とはフィリピン語で、妹とはフィリピン語と日本語で話していたが、最近父親とは日本語で話すようになったと語った。卒業した進学校の中等教育学校には多様な国籍の生徒が通っており、Eさんにも様々な国籍の友人がいる。年に1回、フィリピンに一時滞在していた。

Eさんは父親がビジネスマンであることから、もともとビジネスに対する興味を持っており、厳しさの中にもやりがいがあると考えていた。Eさんにはアメリカに行きたいという夢があったが、高校卒業後は日本の大学の外国語学系学部に進学し、経営学や経済学を学ぶことに決めたという。推薦入試で英語の試験を受けて合格し入学したが、期待したものと異なっていたため、アメリカ留学を決め、退学したと語った。留学予定の大学でもビジネスを専攻する予定であり、アメリカ留学も将来の夢を叶えるためのステップであると考えていた。

大学選んだ理由も、英語を学べる上に経営学とか経済学があって入ったんやけど、あんまりピンとこなくて。[中略]大学入る前から、そのままアメリカ行ったらいいやんって感じやって、お父さんが。行きたいのは山々やけど、勇気がなくて。ちょっといきなりアメリカは厳しいかなと思って。で、たまたま大学受かって。(アメリカには)いつでも行けるやろって感じで入ったけど、早かれ遅かれ。【Eさん】

Oさんは四年制大学の国際学系学部の学生で、日本の大学院への進学を予定していた。両親はフィリピン人で、父方の祖父が日本人である。言語は日本語、英語、フィリピン語の順に得意であり、家庭では両親とは3言語、キョウダイとは日本語で話している。外国人だからという理由で差別されたこともなく、特筆すべき苦労はなかったというが、日本語が上達するにつれてフィリピン語と英語を忘れ、両親との意思疎通には苦労したそうである。中学生の時に1回、大学入学後は年に1回、フィリピンに一時滞在していた。大学入学後にフィリピンでフィリピン語を勉強し、上達したそうである。

進学校に通っていたOさんは、第一志望から第三志望まで全て国際学系と外国語学系の学部を希望していた。言語能力やフィリピンにルーツを持っているという強みを活かすことができ、大学でもさ

らにその強みを磨くことができると考えたからだという。部活動と勉強との両立が難しく、浪人することを考えていたOさんであるが、高校の先生から勧められた第三希望の大学の推薦入試を受け、集団面接を経て合格した。集団面接のテーマは国民性やステレオタイプであったという。

Oさんは調査時には教育学を学んでいたが、進路を決めた時には、興味を持っていた国際協力やボランティアの分野が学べる進学先を選んだ。フィリピンで暮らしていた時に、貧しい子どもたちがいる一方で自分は不自由なく暮らしていたことから疑問を抱き、国際関係やボランティアを学びたいと考えたという。Oさんは大学入学後、フィリピンにルーツを持つ子どもたちの学校生活のサポートにも携わっている。

国際協力とか開発とかボランティアに興味があって入学してきたんです。[中略] 心の中では、世界を良くしたいとか、国際協力でどうしたらもっとみんながより暮らしやすい社会に、不公平なのをなくせるかっていうのがあって。[中略] それを実現するためにどういう道具を使えばいいのかっていう時に、教育なんだって思って。【Oさん】

Rさんは四年制大学の外国語学系学部の大学生で休学中であり、大学在学中に始めた、小・中学校でフィリピンにルーツを持つ子どもたちをサポートする仕事を続けていた。両親はフィリピン人で、言語はフィリピンの地方言語、日本語、英語、フィリピン語の順に得意であり、家庭では両親とはフィリピンの地方言語、キョウダイとはフィリピンの地方言語と日本語で話している。Rさんの中学校には多様な国籍の生徒が通っていた。中学生と高校生の時に各1回、大学入学後は年に1回、フィリピンに一時滞在していた。親戚がアメリカで暮らしており、Rさんはアメリカの生活を経験するために訪れてみたいと語った。

Rさんは高校生の時、幼い頃からの夢であった看護師の道に進むか、来日してから考えるようになった通訳の道に進むかの間で揺れていたそうである。通っていた進学校の高校で助言されたことから医師になろうと考え、浪人して医学部を目指すことにした。だが、全く興味がない文系大学の一般入試の受験を高校の先生に勧められて合格し、入学することにした。大学で視野を広げながら受験勉強も続け、改めて医学部を受験しようと考えていたが、計画は予定通りには進まず、今後の進路に悩み休学したと語った。

小学校の時はずっとアメリカで看護師になりたいって思ってたんですけど、それはお母さんの影響です。でも日本で勉強するって思ってなかったんで、日本に来たら勉強が分からないし、もうアメリカで看護師するのは無理かなって諦めて。[中略] 看護師はほんとすごいなりたいって意志があったんですけど、高校の初めのうちは通訳かな。通訳から看護師にまた変わって、頑張ったら看護師になれるかなって思ったんですけど。それから先生に、医者目指したらって（言われて）。[中略] 高校卒業したら浪人を2年、3年ぐらいして、医者を目指そうかなって思ってたんです。大学は、浪人してる間、すごい大学に入ったっていうのが励みになるからって先生に言われただけで、入るつもりは最初なくて。[中略] 学校も先生が選んでくれて。合格したら私行きたいって思うように……。なんかもう疲れたっていうか……。【Rさん】

TさんはRさんの姉で、短大の外国語学系学部を卒業後、小・中学校でフィリピンにルーツを持

つ子どもたちをサポートする仕事に就き、通訳や翻訳にも携わっていた。言語はフィリピンの地方言語、フィリピン語、英語、日本語の順に得意であり、話す時にはフィリピンの地方言語とフィリピン語、読む時には英語が最も使いやすいという。家庭では主にフィリピンの地方言語を話し、日本語も使っている。Tさんの中学校と高校には多様な国籍の生徒が通っており、Tさんにも様々な国籍の友人がいる。Tさんの高校は進路多様校である。来日後3回、フィリピンに一時滞在した。

Tさんが短大に進学しようとした理由は日本語を学ぶためであった。日本語と共に、Tさんが好きな言語である英語も学ぶことができる短大を選んだという。授業時間帯が夕刻から夜間に設定されており、午前中に働くことができることも、進学先を選んだ理由であった。Tさんは同じ高校のブラジル人の友人と共に推薦入試を利用して英語の試験を受けて合格し、英語を専攻した。

その頃、日本語の知識が足りないと感じていて、日本語をもっと勉強したかったからです。ちょうど〇〇大学から私たちの高校に体験談を話しに来てくれた人がいて、ブラジル人の友人と私はそこで勉強することを勧められました。日本文化がいつかの町について知ることができ、好きな言語である英語が学べると思いました。もちろん日本語も。友人と私は、朝働いて午後に通うことができる〇〇大学は良いと思いました。【Tさん】

Tさんは日本語で苦勞しているフィリピン人を助けたいと考えていたようで、抱いていた翻訳家や英語教師になりたいという夢も進学を決めた理由の一つであった。周囲との意思疎通や勉強に苦勞した経験から、子どもたちには同じ思いをさせたくないという気持ちでサポートしていると語った。

通訳者と英語の先生になりたいと思っていました。日本語に苦勞しているフィリピン人を手助けできるように通訳者になれば、と言っていました。[中略] 子どもたちの手助けをしたいです。私が昔感じたことを子どもたちには感じて欲しくないからです。私は日本で勉強したのにそれを活かさなければ、私みたいなフィリピン人が手助けしなければ、もったいないでしょう。【Tさん】

フィリピンから日本への移動を経験した6名は両方の国で暮らし、学校に通った経験がある。フィリピンやアメリカで暮らす親戚や、フィリピン出身で日本に暮らす親戚との交流があり、日本在住中には定期的にフィリピンに一時滞在している。日本語を含む複数の言語の運用能力があり、家庭でも複数の言語を使用している。Aさん、Bさん、Eさん、Tさんの中学校や高校には多様な国籍の生徒が通っており、4名にも様々な国籍の友人がいた。

Aさん、Bさん、Eさん、Tさんの4名に共通する進学理由の特徴は、秀でている英語をさらに学び、その能力を向上させたいと考えていることである。英語を学ぶため、英語の能力を活かした仕事に就くために進学したいと考えており、入学試験でも英語の能力が有利に働いていた。Rさんの場合、進学した大学と学部は本人の希望とは異なっていたものの、高校の先生はRさんの英語の能力が有利に働く大学を勧めて受験させた。Oさんは、フィリピンでの経験から関心を抱いた分野を学びたいと考えていた。

(2) 日比間で複数回の移動を経験した場合

日比間で複数回の移動を経験したのはIさん、Nさん、Sさん、Vさんである。

Iさんはフィリピンで四年制大学の国際学系学部に通う学生であった。高校では多様な国籍の生徒が学んでおり、Iさんにも様々な国籍の友人がいる。日本語、フィリピン語、英語が理解でき、日本語とフィリピン語が同程度に使いやすく、読み書きと思考にはフィリピン語を使うことが多いそうである。日本の家族と話す時にもフィリピンでの日常生活でもフィリピン語と日本語の両方を使っている。日本には自分の家族のほか、母方の親戚も暮らしている。母親の教育にはカトリックの価値観が影響しているという。14歳で再来日した後は2回程度フィリピンに一時滞在した。

Iさんは幼い頃、日本で暮らしていた時に、消防士が主人公であるアメリカ映画を見て消防士になりたいという夢を持った。消防士は日本では社会的評価が高いが、フィリピンでは低い。そのためIさんは、6歳でフィリピンに移った後、小学校の同級生にその夢を笑われ、親戚の大人たちには、消防士になってはいけないと言われたそうである。その出来事が国際関係や異文化理解に目を向けるきっかけとなったと語った。

卒業した高校は進学校で、Iさんは国際関係コースに通っていたそうである。高校2年生の時は日本の大学を受験するつもりであったが、大学見学に参加した時、自分が学びたいことが学べないのではないかと感じたという。Iさんは日本の大学とフィリピンの大学で学ぶ良さを客観的に見極め、英語を専門的に学びたいという希望からフィリピンの大学を選択した。

中学生の頃までは、フィリピンの学校の先生になりたいという夢を持っていたが、フィリピンでは教員の給与が低いことから、日本で暮らす間にその夢は消えたという。ジャーナリストに興味があるが、将来就きたい職業はまだ決まっていない。母親には日本で働いた方が経済的に安心で自分の将来のためになると説得されており、母親の助言は十分に理解しているが、仕事をする国もまだ決めていないと語った。

(見学した) 授業は良かったんです。テクニカルな面では日本の方が優れてると思うんですよね。でもそれを伝える伝え方とか、プレゼン力では、英語でできるというか、その仕方はやっぱりフィリピンの方がよかったかな。[中略] 日本に戻るか、アメリカで大学に行くか、それともフィリピンで何らかの形で仕事できるか。決まったのはあまりないです。とりあえず勉強だけしたいです。【Iさん】

Nさんはフィリピンで企業に勤めた後、フリーランスで翻訳の仕事をしていた。両親はフィリピン人である。フィリピン語、英語、日本語の3言語に堪能である。家庭内言語は日本でもフィリピンでも日本語が中心である。日本ではインターナショナルスクールに通うという選択肢もあった。だが、子どもたちに日本人の友人ができるようにという両親の考えにより、日本の学校に通ったそうである。通っていた中学校と進学校の高校には多様な国籍の生徒が通っていた。日本滞在中には年に1回、フィリピンに一時滞在していた。

Nさんは高校卒業後、フィリピンで日本の国費外国人留学生に採用された。日本語に堪能ではあったが、日本では1年間、在籍大学とは別の大学で日本語を学んだ。日本語を学んだ大学では大好きな古典の授業も受けたという。在籍大学に移って法律を専攻し、卒業はせずにフィリピンへ戻った。

Sさんは高校生で、外国語学系の短期大学への進学が決まっていた。妹2人はまだ来日できない

ため、フィリピン人の母親は妹たちとフィリピンで暮らしており、Sさんは姉、姉の恋人、母方の従兄弟と暮らしていた。Sさんの高校は進路多様校であった。高校には多様な国籍の生徒が通っており、Sさんにも様々な国籍の友人がいる。日本語とフィリピン語が同程度に使いやすく、英語も理解することができる。家庭ではフィリピン語で話しているが、中学生の時には練習のために日本語も使い、2言語を話していた。Sさんは年に1～2回、フィリピンに一時滞在していた。

Sさんは短大に進学したいとは考えていなかったが、高校卒業後に社会人になるのはまだ早いと考えて、同じ高校に通うフィリピンにルーツを持つ友人らと同じ短大を受験することにした。外国人がたくさん通っていたこと、推薦入試で課せられる科目が英語のみであったこと、合格できる可能性がある短大は他にないと思ったことも、進学先を決めた理由であったという。

Sさんはフィリピンの大学に通う先輩の影響で、フィリピンでの大学進学も選択肢に入れていたという。短大に合格したことから、日本での就職を視野に入れ、日本での進学を決めたと言った。短大では英語を専攻するという。

短大に受からなかったらフィリピンで大学行くつもりだったけど、受かったから日本にする。フィリピンで大学行っても、就職できるかどうか分かんないから。[中略] 卒業してから、妹たちの学校とか、払わなあかんやん。[中略] 今払ってるの、お姉ちゃんの方やから。短大卒業してからは私(が払うこと)になるから。【Sさん】

Sさんは進学して何を勉強すればよいか考えることが難しかったというが、自分には英語や日本語を使った仕事ができるのではないかと考えていた。将来フィリピンでビジネスをしたいという希望があるというが、まずは日本で働き、妹たちが自立するまで支えようと考えている。

大学で何を勉強すればいいか分からなかった。考えるのも難しかったし。やっぱ日本で働くしかないじゃん。フィリピンで働いたら、お金なんもならんし。[中略] 日本やったら、私何ができるんかなと思って、やっぱ英語に関係ある仕事じゃないんかなと思って。やっぱ英語できるの、強みやんか、日本では。フィリピンやったら普通やし。フィリピンで働くことになったら日本語もできるし、その関係で働けばいいんじゃないかなって思って。(短大の)奨学金を返すのと、妹たちがちゃんとやっっていけるんやったら、その時からフィリピンでビジネスとかしようかなって。【Sさん】

Vさんは調査時には高校生で、短大の外国語学系学部に進学することが決まっていた。Vさんの中学校と高校には多様な国籍の生徒が通っていた。言語はフィリピン語、英語、日本語の順に得意であり、家庭で母親やキョウダイと話す時には3言語を使用しているという。フィリピンで暮らす親戚とはほぼ毎日インターネットで連絡を取り合う。フィリピンの友人とも普段から連絡を取っており、年に1回、フィリピンに一時滞在する際には再会しているという。

Vさんが通っていた高校は進路多様校であった。フィリピンにルーツを持つ先輩が進学した別の短大を受験しようと考えていたが、家から近く、学習面での支援と、奨学金や授業料減免といった経済的支援が整っていて就職率が高い短大に志望先を変えたそうである。日本の空港で働きたいという希望があり、グランドスタッフになりたいと言った。短大では英語科で学ぶことになるが、日本語を

もっと身につけたいと考えている。入学試験は推薦入試を利用し、課された科目は英語のみであった。

(進学先の短大は)小さいので、先生にしっかり教えてもらえてポイントがつかめます。それに就職率が高くて、卒業後すぐに仕事が得られます。[中略] その大学にはたくさんの利点があります。第一志望で入学すれば入学金が免除されます。成績が良ければ授業料も減額されます。【Vさん】

日比間で複数回の移動を経験した4名も両方の国で暮らし、学校に通った経験がある。フィリピンで暮らす親戚や、フィリピン出身で日本に暮らす親戚との交流があり、日本在住中には定期的にフィリピンに一時滞在している。日本語を含む複数の言語の運用能力があり、家庭でも複数の言語を使用している。中学校や高校には多様な国籍の生徒が通っており、様々な国籍の友人がいた。

Iさん、Sさん、Vさんの3名に共通する進学理由の特徴は、秀でている英語をさらに学びたいと考えたことであり、3名の進学には英語の能力が有利に働いていた。Nさんの場合、国費外国人留学生の選考試験には日本語と英語が課せられることから、2言語の運用能力が有利に働いた可能性が高い。SさんとVさんの進学理由のもう1つの特徴は、将来の就職のためであり、Sさんの進学理由が就職である背景には、家族を助ける必要があるという事情も影響している。Iさんが国際学系の進路を選択した契機は、フィリピンと日本での経験であり、学びたいことがより専門的に学べることから、日本ではなくフィリピンでの進学を選択した。

(3) 日本生まれ日本育ちの場合

日本生まれ日本育ちの調査対象者は、PさんとYさんである。

Pさんは四年制大学の国際学系学部の学生で、フィリピンの大学院への進学を予定していた。日本人の父親の実家で暮らしていた間は、家庭でも地域でもフィリピンにルーツを持つことを表に出すことはできず、家庭内言語も日本語のみであったという。幼い頃には年に1回程度フィリピンを訪れていたが、小学校の後半からフィリピンに対する感情が否定的になり、訪れなくなった。17歳の時に気が向いて母親とフィリピンを訪れ、親戚と久しぶりに会った際、フィリピンは自分が帰る場所であるという感情を抱いたという。

母親の教育はフィリピン式であり、時々母親と弟と共に教会にも通っているという。フィリピン語は聞き取ることはでき、話すことは難しかったが、18歳から親戚や母親に教えてもらい、話せるようになった。母親には英語も教わったそうである。日本国籍のみを持っているが、フィリピン国籍も取得することを考えていると語った。

Pさんは進学校の高校に通っていた。久しぶりに母親とフィリピンを訪れたことをきっかけに、母親がフィリピン人であることを強みにして大学で勉強しようと考えようになったという。夏休みの1か月間、単身でフィリピンに滞在した後、「国際」という言葉がつけられている学部を受験しようと考えた。高校の先生から勧められた大学の推薦入試で集団面接を受けて合格したそうである。Pさんは大学入学後、フィリピンにルーツを持つ子どもたちの学校生活のサポートにも携わっている。

母親がフィリピン人であることをすごい否定してたんですよ。日本人になりたかったし。でも逆にそれを自分の強みにして大学に行ったら、きっと私人生変わるんじゃないかなって思ったのが高校生の時で。大学でそういうこと勉強したいなって思ったのがきっかけなんです。[中略]

母親がフィリピン人じゃなかったら、たぶん大学も、今のところに行かなかったと思う。それに、たぶん自分で気づかなかつたら、別の学部で勉強して、今頃たぶん就職でも決まっていたんじゃないかなって今でも思います。【Pさん】

Yさんは四年制大学の国際学系学部の学生であった。幼い頃には母親、伯母、イトコらと共に年に2回程度フィリピンを訪れており、現在でもフィリピンで暮らす親戚との交流がある。もう1人の母方の伯母はアメリカ在住で、Yさんは英語を学ぶために、伯母の家に約1か月間滞在したこともある。母方の祖父母はカナダ在住である。家庭内言語は日本語であるが、食卓には母親が作るフィリピン料理がよく並び、時々母親と共に教会にも通っているという。母親が話すのを聞いていたことから、フィリピン語は日常会話に困らない程度に聞き取ることができるが、話すことは難しい。

Yさんは日本人の父親が携わるものづくりの仕事を継ぎたいと考え、ものづくりの専門的な知識や技術が学べる高校に通った。インテリア系の勉強を大学でも続けたいと思っており、英語や国際関係には全く興味がなかったという。だが進学先を決める前に偶然見学した大学で国際学系学部に自分とのつながりを感じ、興味が湧いたそうである。母親が日本語を勉強していることから、以前は日本語教師になりたいと考えていたという。今は進路に悩んでおり、フィリピンでの仕事や国際協力の分野に進むことを視野に入れてしていると語った。

ちょっと国際のも見てみたら、自分の中にあつた何かすごい湧いてきて、ああ、やりたいなって思ってた。そういうところで、やっぱりハーフで、つながりがあるんだなって思いましたね、話を聞いた時に。[中略] 英語も全然できないですし、全く無縁だったんですけど。【Yさん】

Yさんが通った高校は進路多様校で、大学に進学する卒業生は約4分の1であり、Yさんによると「ほとんど英語関係とか行く人はいない」そうである。Yさんが受けた推薦入試の面接では、言語能力も質問されたが、話せないと答えたそうである。

やっぱり、フィリピン語しゃべれるの?とか、すごい言われて。あ、ちょっとしゃべれないですね、みたいな。でもなんとか入れたんで。【Yさん】

日本生まれ日本育ちの2名にはフィリピンやアメリカで暮らす親戚との交流があり、実際に現地を訪問している。家庭ではフィリピン料理を食し、母親と共に教会にも通い、日常生活でもフィリピンの習慣や価値観に接する機会があった。大学卒業後にはフィリピンやその他の国での大学院進学や就職を選択するか、もしくは視野に入れているが、大学進学時には日本での進学を選んだ。

2名に共通している進学理由の特徴は、フィリピンにルーツを持つことを資源とし、強みとしていることである。家庭内言語は日本語であり、フィリピン語は聞いて理解することはできるが、話すのは難しく、英語も堪能というわけではなかった。そのため、得意な言語を活用したいという理由よりは、フィリピンにルーツを持つことから、国際学系の学部に関心を持ち進学したいと考えていた。

しかしながらPさんによると、フィリピン人の母親を持つ日本国籍の人には、フィリピン語が話せず、フィリピンにあまり関心がなく否定的な人が多いそうである。またYさんも、父親が日本人で母親がフィリピン人という人に、フィリピンに興味のある人は少なく、母親がフィリピン人という知り

合いの学生の中ではYさんくらいだと語っていた。従って、日本生まれ日本育ちで大学や短大に進学した人の全てがフィリピンにルーツを持つことを資源としているとは言えない。

6 フィリピンにルーツを持つ子どもの大学・短期大学への進学理由の特徴

本稿の調査対象者の進学理由の特徴は3点にまとめることができる。

1点目は国際的な経験を基に進学を希望していることである。日比間を移動した調査対象者は両国での生活を体験しており、学校教育も両国で受けた経験がある。両親または母親がフィリピン人であることから、日比間の移動経験の有無にかかわらず全員が、日本在住中にフィリピンを訪問し、フィリピンで暮らす親族との交流もある。日本では家庭でフィリピンの価値観に触れる機会を得ており、複数の言語を使用し、フィリピンにルーツを持つ大人や子どもとの関係も築いている。8名の中学校や高校には多様な国籍の生徒が通っており、様々な国籍の友人がいたことから、学校内も国際的であったと言える。

11名のうち10名が進学した大学や短大の学部が外国語学系や国際学系であったことには、国際的な経験が影響している。Oさんは、フィリピンで暮らしていた時に子どもたちの貧困を目にして抱いた疑問から国際関係やボランティアに関心を持った。Tさんは、日本語が理解できずに苦労した経験があり、他のフィリピン人が苦労していたことから、助けたいと考えたと語っていた。Iさんは幼い頃に抱いた夢に対する評価が日本とフィリピンでは異なったことが、国際関係や異文化理解に目を向けるきっかけとなったと語った。Rさんのように、日比間を移動したことによって夢を諦め、代わりの選択をせざるを得なかった人もいるが、10名が外国語学系や国際学系を選択した背景には、異なる環境で生活したことから抱くようになった興味関心、多様な国籍の生徒と学んだ経験、母親がフィリピン人であるというフィリピンとのつながりが影響していると言える。

2点目は言語能力の優位性を活かしたいと考えていることである。出生地や国籍、移動の頻度、移動時の年齢にかかわらず、日比間の移動を経験した人たちは、英語をフィリピンでの生活や学校教育で習得し、日本在住中に維持するか向上させていた。

7名は得意な英語を学びたいと進学を希望した。英語の運用能力があることは、フィリピンでは当然のことであり有利には働かないが、日本では有利になることに気づき、英語の運用能力を強みにして日本で進学した人たちである。Iさんのように英語をより専門的に学べると考えてフィリピンでの進学を選択した人もおり、Nさんのように日本語と英語の運用能力の優位性が働いた人もいる。

Bさん、Tさん、Sさん、Vさんの4名の進学理由には、英語を学びたいという理由だけではなく、日本語を習得したいという理由もあった。4名は日本語運用能力を十分に獲得できていないと感じており、高校卒業後すぐに就職するのではなく、進学先で日本語をさらに学んでから社会に出たいと考えていた。4名の事例は、日本語運用能力が不足しているために、英語の優位性を活かせる進学先のみを選択肢が限られていたことを示唆しているとも言える。

3点目は進学先の国を日本に限定せず、他国での進学も選択肢に入れていることである。進学先の国の選択には、出生地や国籍、移動経験の頻度、移動時の年齢による差異はない。

山崎(2005)ではニューカマー高校生の進学志望先は日本や母国だけに留まらず、第三国においても活躍していくことを望んでいることが、Takahata(2011)では在日フィリピン人1.5世代が将来日比間をまたぐ仕事をしたいと考えていることが指摘されている。徳永(2008)では、中学3年生のフィ

リピン系女子生徒のうち、日本定住予定であり進路意識が安定している人と、日本定住を決定し進路意識が安定する人は日本で、日本定住意思が希薄であり進路意識が揺らぐ人はフィリピンやアメリカでの進学や就職を希望していたという。

上記の研究の調査対象者と本稿の調査対象者は学年や年齢が異なるため、安易に比較することはできない。しかしながら高校の英語教師になりたいAさん、通訳か英会話教室の先生になりたいBさん、苦労しているフィリピン人を助けたいと考えていたTさん、英語を活かした仕事に就きたいSさん、就職率が高い短大を選んだVさんは、将来日本で働こうと考えていた。日本での就職を視野に入れている人は日本で進学する傾向が強く、日本の大学や短大に進学することが有利であると考えていると言える。

ただしSさんは短大に合格する前には、フィリピンでの進学も視野に入れていたことや、日本で働いた後はフィリピンでビジネスをしたいと考えていることから、日本定住の意思が固定されているわけではない。日本生まれ日本育ちのPさんとYさんの場合、大学進学時には日本を選択したが、大学院進学や就職にはフィリピンを選択するか、もしくは視野に入れている。選択肢が多いことには、より自らの希望に近い進路を選び、能力を活かすことが可能であるという利点もある一方、迷いや揺れも伴っている。

今回の調査対象者の場合、進学先の国を選択する際に性別が影響した可能性がある。家族とともに暮らしていた日本を離れてアメリカに留学するEさんとフィリピンの大学に進学したIさん、フィリピンを離れて日本の大学に留学したNさんともに男性である。日本で短大に進学したBさんの双子の兄も家族が暮らす日本を離れてフィリピンで進学した。フィリピンでの進学を視野に入れていたSさんと大学卒業後にフィリピンの大学院への進学を予定していたPさんは女性であることや、調査対象者の人数が少ないことから、断言することはできないが、大学や短大への進学時には、男性の方が家族と離れて他国での進学を選択することが可能であったと言える。

本稿の調査対象者の進学理由の特徴は、日本で暮らす他国にルーツを持つ子どもの進学の特徴と以下の2点で相違していると指摘することができる。

今回の調査対象者の進路選択には、中国系生徒に注目した広崎(2007)の研究で指摘されている、進路多様校か進学校かという学校文化が及ぼす影響は小さかった。進学校に通った対象者6名の場合、学校文化が大学への進学を促した可能性は大きい。しかしながら進路多様校で専門学校への進学や就職をする生徒も多い学校に通った対象者6名も大学や短大へ進学している。BさんやSさんのように一度は就職を考えた人も短大に進学したことから、進路多様校の学校文化の影響は小さいと言える。

フィリピンにルーツを持つ子どもが進学のために単身でフィリピンに移ることに、ブラジルにルーツを持つ子どもがブラジルへ移ることはほとんど困難を伴っていない。矢野(2007)によると、ブラジル人生徒が大学進学のためにブラジルに帰国するために日本に残る両親と離れて暮らすことは、生徒や家族にとって難しい。しかしながらフィリピンへの移動にかかる費用は安いことに加え、フィリピンでは大家族も多く、親戚同士が助け合い、子どもを預け合うのは自然なことである。長坂(2009)では、イタリアへ移住したフィリピン人移住者の故郷の近親者のもとに残された子どもが近親者のネットワークの中で養育される事例が挙げられている。

日本で暮らすフィリピンにルーツを持つ子どもたちも同様に、フィリピンで暮らしている家族や親戚との結びつきが強く、フィリピンで暮らしている家族のもとに移ることや、日本に移動する前に養育してくれていた親戚の家に帰ることが可能である。フィリピンから海外に移住する人や働きに出る

人が多いことから、アメリカなどフィリピン以外の国に移ることへの抵抗も少ない。家族と離れて他国で進学する心理的・物理的障壁が低いことは、フィリピンにルーツを持つ子どもたちの進学の特徴である。

本稿での調査対象者であるフィリピンにルーツを持つ子どもたちの中には、将来、日本の高校で英語教師になりたい人、NGOで働きたいと考えている人、既に自分と同じ境遇にある子どもたちをサポートしている人のように、日比間の架け橋として働きたい、もしくは既に架け橋として働いている人もいる。また国家間の移動に抵抗が少なく、日本でもフィリピンでも他国でも活躍できる可能性を秘めており、多様な人々が暮らす社会を支えるグローバル人材となり得る人たちである。

7 むすび

本稿ではフィリピンにルーツを持つ子どもたちが大学や短大へ進学することを決めた理由に着目した。今回の調査対象者の多くは外国語学系や国際学系の学部に進学したが、それ以外の専攻を選ぶ人もいるし、高校卒業後に大学や短大進学以外の進路を選ぶ人もいる。また、学齢期途中で日本からフィリピンへ移動し、フィリピンでハイスクールを卒業後、現地の大学に進学している人たちもいる。今回の調査対象者とは異なる進路を選んだ人たちの進路選択の理由を明らかにすることを今後の課題としたい。

※〈謝辞〉快く調査にご協力いただきました調査対象者の皆様に心より感謝申し上げます。また第20回フィリピン研究会全国フォーラムにおける発表（2015年7月5日、於静岡県立大学）にて非常に有益なご意見を下さいました皆様に御礼申し上げます。

- *1 帰国児童生徒とは、海外勤務者等と共に引続き1年を超える期間海外に在留し、調査年度の前年度の間に帰国した者をいう。外国から日本に移ってきた外国にルーツを持つ日本国籍または重国籍の子どもたちも含まれていると考えられる。
- *2 日本語指導が必要か否かの明確な判断基準はないため、日本語指導が必要と判断されるかどうかは、判断する教員や学校によって異なる可能性もある。調査対象者のうち初等中等教育段階で日本に移動した人は日本語の理解が難しい時期があり、日本への移動後数年間は当該の統計調査の人数に含まれていたと考えられる。
- *3 本稿でフィリピン語、フィリピノ語、タガログ語は全て「フィリピン語」と表記する。
- *4 進路多様校とは、進学、就職、進路未定等、多様な進路が混在している高校のことである。

《参考文献》

日本語

- ・イシカワエウニセアケミ、2014「大学進学を果たす日系移民二世たち」宮島喬・藤巻秀樹・石原進・鈴木江理子編集協力『なぜ今、移民問題か（別冊「環」20）』藤原書店、272～275頁
- ・今井貴代子、2008「『今—ここ』から描かれる将来」志水宏吉編『高校を生きるニューカマー——大阪府立高校にみる教育支援』明石書店、182～197頁
- ・鍛冶 致、2007「中国出身生徒の進路規定要因——大阪の中国帰国生徒を中心に」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第80集、331～349頁
- ・金井香里、2004「日本におけるマイノリティの学業不振をめぐる議論」『文部科学省21世紀COEプログラム東京大学大学院教育学研究科基礎学力研究開発センターワーキングペーパー』第10巻、1～10頁

- ・高畑 幸、2011「在日フィリピン人の一・五世代——教育と労働が隣り合わせの若者たち」『解放教育』第41巻第10号、明治図書出版、54～63頁
- ・谷口綾子、2010「ニューカマー高校生の大学進学に対する学校・教師・支援者の役割」横浜市立大学大学院国際総合科学研究科国際文化研究専攻編『国際文化研究紀要』第17号、293～316頁
- ・徳永智子、2008「『フィリピン系ニューカマー』生徒の進路意識と将来展望——『重要な他者』と『来日経緯』に着目して」異文化間教育学会編『異文化間教育』第28号、87～99頁
- ・長坂 格、2009『国境を越えるフィリピン村人の民族誌——トランスナショナルリズムの人類学』明石書店
- ・額賀美紗子、2012「トランスナショナルな家族の再編と教育意識——フィリピン系ニューカマーを事例に」和光大学現代人間学部編『和光大学現代人間学部紀要』第5号、7～22頁
- ・拝野寿美子、2010『ブラジル人学校の子どもたち——「日本かブラジルか」を超えて』ナカニシヤ出版
- ・広崎純子、2007「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択——支援活動の取り組みを通じての変容過程」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第80集、227～245頁
- ・文部科学省、2015a「学校基本調査（平成26年度）」（<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>、2015年6月22日アクセス）
- ・文部科学省、2015b「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成26年度）の結果について」（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/_icsFiles/afiedfile/2015/06/19/1357044_01.pdf、2015年6月22日アクセス）
- ・矢野パトリシア、2007「トランスナショナルな移住を経験している家族——日系ブラジル人家族の現在状況」名古屋市立大学編『人間文化研究』第8号、127～141頁
- ・山崎香織、2005「ニューカマー高校生の進路意識に関する一考察——『準拠集団』に注目して」名古屋大学大学院教育発達科学研究科編『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第52巻第2号、57～66頁
- ・山崎香織、2009「『移動』時代のキャリア教育——ニューカマー高校生の事例」異文化間教育学会編『異文化間教育』第30号、91～103頁

外国語

- ・Phinney, J. S., Dennis, J. and Osorio, S., 2006. Reasons to Attend College among Ethnically Diverse College Students, *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology* 12 (2), pp.347-366.
- ・Takahata, S., 2011, The 1.5-Generation Filipinos in Japan: Focus on Adjustment to School System and Career Development, 広島国際学院大学現代社会学部編『現代社会学』第12号, 33～46頁

Reasons to Attend College and Junior College among Children with Filipino Roots:

The Case Studies of Children Who Graduated from Senior High School in Japan

YAMOTO Kimi *Global Collaboration Center, Osaka University*

Key Words: Filipinos in Japan, career, college

This article aims to clarify the reasons why children with Filipino roots attend college and junior college and to discuss the characteristics of the reasons. The career of the children with Filipino roots who graduated from senior high school in Japan has been poorly examined so far. This article focuses on children who received elementary and secondary education in both the Philippines and Japan or only in Japan, graduated from senior high school in Japan and then entered college and junior college. Based on the interviews with twelve interviewees, this article identifies the reasons why they attend college and junior college, presents some cases regarding this and analyzes. This study found the following three characteristics of the reasons. First, they wish to attend college and junior college because of their international experiences. Their interest in the way of life in a different environment, their high school life with students with various nationalities and their ties to the Philippines influence the reasons why ten of them took foreign and international studies courses. Second, they wish to utilize the advantage of language proficiencies. Many of them who experienced moving between the Philippines and Japan took advantage of their English ability to enter college. Third, they also regard attending college outside Japan as an option. Having many choices provides not only benefits but also hesitation and uncertainty. They have the potential to become globally minded human resources who will support societies with diverse people in the future.